



1. 国立清華大学(台湾)と学術・学生交流協定を締結

平成19年8月24日、本学と台湾の国立清華大学(台湾新竹市光復路二段)は学術及び学生交流に関する協定を締結しました。調印式は、国立清華大学から陳文村学長、陳中民執行長らを迎え、コラボレーションセンター会見室において行われました。

国立清華大学は、理学部・工学部・生命科学部・原子科学部・人文社会学部・科技管理学部・電機コンピュータ学部等からなり、学部学生は約5000名、大学院を含めると約1万人の学生が在籍しています。重点大学(特に理工系)に指定されている台湾を代表する総合大学であり、台湾国内の企業からも高く評価され、ノーベル賞受賞者も出ています。

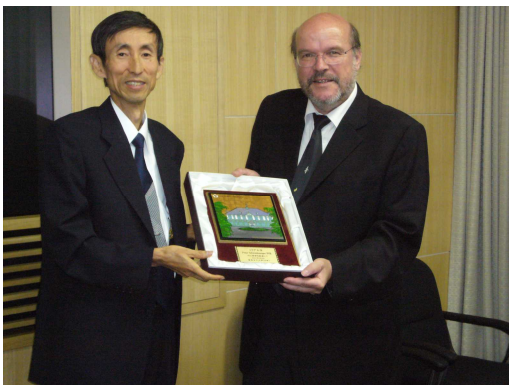
本協定は、本学の「アジアジェンダー文化学術研究センター」と国立清華大学の人文社会学部の「ジェンダーと社会研究室」との研究者交流を契機に締結されたもので

すが、今後、この分野に限定せず、理工系も含めた共同研究や学生交流の推進等に向けた活発な学術交流が期待されます。

今回の協定締結は、奈良女子大学にとって29大学(部局間交流を含む)目で、台湾にある大学とは、初めての協定締結となります。



2. トリア大学 Schwenkmezger 学長 久米学長を表敬訪問



本学文学部及び大学院人間文化研究学科と国際交流協定を締結しているトリア大学(独)のシュヴェンクメツガー(Peter Schwenkmezger)学長、ハウングス(Gretlles Haungs)国際交流部長、ゴスマン(Hilaria Gössmann)文学部日本語学科教授が、9月28日久米学長を表敬訪問されました。2006年3月30日に協定を締結し、現在本学は、トリア大学からは文学部へ1名、大学院博士前期課程言語文化学専攻へ1名の学生を交換留学生として受け入れており、本学からは、文学部から2名の学生をトリア大学FB(語学・文学系学群)へ交換留学生として派遣しています。

当日は、コラボレーションセンター会見室において、久米学長、清水、井上の両副学長、吉野事務局長、出田文学部長、西堀国際交流センター長、千田文学部准教授が出席し懇談が行われました。

シュヴェンクメツガー学長は、本学が女子大学として存続していることに興味を示され、設立経緯や女子大の意義についての質問も多数されました。また、両大学とも歴史ある大学であり、周辺地域には世界遺産を持つことも共通しているなど、これらの特色を生かした交流と協力関係を構築するための意見交換が行われました。

3. パリ・デイドロ パリ第7大学 堀内美都教授をお招きして

奈良女子大学は、2005年10月、現在のパリ・デイドロ パリ第7大学と交換学生交流協定を含む大学間交流協定を締結しました。協定締結当時は、大学名がパリ第7大学でしたが、2007年3月、パリ・デイドロ パリ第7大学に変わりました。

国際交流センターは、7月23、24日の両日、東アジア言語文化学部堀内美都教授をお招きし、パリ・デイドロ パリ第7大学の教育・研究や国際交流、加えてフランスの大学改革等についてお話を頂くとともに、本学文学部言語文化学科の三野教授をはじめとする仏文学・仏語系の教員との交流や学生との懇談などの機会を設けました。

堀内先生には本学との交流協定締結時にパリ・デイドロ パリ第7大学側の担当者として多々ご尽力いただきましたが、現在も先生はご専門の和算研究や日本語・日本文化研究のかたわら、日本の大学との国際交流業務に関し、パリ・デイドロ パリ第7大学の責任者としてご活躍されております。

以下は、堀内先生にお話いただいた内容について国際交流センターがその内容を「国際交流センターNews Letter」の記事としてまとめたものです。



この度はお招きいただきましたことにお礼を申し上げたいと思います。このような形で大勢の方にお会いでき、本当に嬉しく思います。

パリ・デイドロ パリ第7大学(*)の現状

まずパリ・デイドロ大学がどのような大学であるかということを、インターネットのウェブサイトを利用して少し説明したいと思います。

「パリ・デイドロ大学」という名前ですが、協定を結んだときは「パリ第7大学」で通っていたのですが、最近名前を変えました。ウェブサイトの見出しでは「PARIS DIDEROT」と書いてありまして、その下に小さい文字で「PARIS 7」と書いてあります。おそらく近い将来この「PARIS 7」は無くなるのではないかと私は予想しております。フランスの大学は10年前から改革が次々となされています。それを考慮して名前も変えていくという動きがあるのです。

どういふ大学かという、まず歴史はあまり古くないのです。1970年にパリ・ソルボンヌ大学という一つの大きな大学があったのですが、それを分割していくつも大学をつくったわけです。そのうちの 하나가パリ第7大学です。パリの大学には、医学部しかない大学とか工学部しかない大学とかが結構あるのですが、そのような中、パリ第7の場合は総合大学であるということが特徴だといえます。大体パリの大学というのは、一つの学部が元になって創立され、その後どんどん学部を足していったという形態です。パリ第7の場合は、細かい歴史はウェブサイトにもあまり載っていないし、歴史を辿ってきた人に直接尋ねない限り、詳しいことはわかりません。50周年で書くかもしれませんが…。

現在は、医学部、人文学部、理学部の三つの学部があり、その中にいくつもの学科があります。人文学部には、例えばイギリス・アメリカが中心となった言語文化学科があります。私が所属しているのは東アジア言語文化学科です。割と大きな学科であり、さらにパリにあるということで比較的珍しいと言えます。この東アジア言語文化学科の中には、中国、日本、ベトナム、韓国の四つの小さい教室のようなものがあります。人数の上では、現在、日本語を勉強する学生が一番多いですね。中国語を勉強する学生はどんどん増えていますが、経済のことを考えて勉強するので、情熱がいまひとつで、日本語の学生の方が根気が

(*)堀内先生のお話の中ではパリ・デイドロ大学と表記します。

あるというか、やる気があるようです。その他に、文学、美術、映画の学科は、非常に有名な教授が教えていますので学生がたくさん集まります。特に大学院レベルで日本から優秀な学生が大勢来ていますので、この学科の先生方は日本の学生を非常に意識して歓迎しています。それ以外に、地理、歴史、社会学の学科があります。歴史はアフリカとか、東南アジアとか、元植民地の国の歴史とか、そういった方面が一番研究されています。非常に簡単に説明いたしましたが、これが大学のおおよその構成です。

パリ・デイドロ大学の歴史の中で一番最近に起こった非常に重要な出来事は、移転です。ウェブサイトを見ますと、今までいかにパリ・デイドロ大学がバラバラな形で存在していたかが分かります。今後数年をかけ、セーヌ川の左岸にある昔の工場や倉庫などの石造りの建物を改修し、そこに徐々に移るというプロジェクトを進めています。入りきらない学科は、別に新しく建てた建物に入ります。これらの建物は一箇所に集まっているわけではありませんが、ある程度近い距離にあるので、これまでのようにバラバラというわけではなくなります。

フランスにおける大学改革の波

フランスの大学全体に関しても大きな改革が起っています。今年5月、サルコジ大統領が当選してすぐ、7月には国会に大学を改革するというプログラムが出され、ものすごいスピードで大学改革が進んでいます。

その改革の内容というのは、フランスの大学は全て国立ですので、それを全て法人化してしまうというものです。大学関係者には全く相談せず一気に決めてしまい、今年9月から法人化に向かっている準備作業にかからなければならないという状況です。

他にも2年前の2005年に行った、教育の内容に関する改革があります。それはヨーロッパレベルで教育の修学年数を統一するというものです。LMDというシステムで、L(Licence)はいわゆる学士で、これが3年制。そのあとがM(Master)で修士、これが2年制、D(Doctorat)が博士でこれが3年制です。これをヨーロッパレベルで政治家が集まって決め、その後私たちにやりなさいと指示があり、まずパリ第5から決め、順々に改革を行っていきました。私たちの大学は2005年に行いました。これは非常に時間もかかり、大学間の調整もありましたし、かなり苦労しました。今まで4年制だったシステムを3年制にするということは、かなり教育の内容に関係してきます。それに、それまで1年で取っていたマスターを今度は2年制にするので、かなり内容を考える必要があります。開始してまだ2年足らずですが、やっと2年目になって先が見えてきたという状況にあります。

今度もし次の改革があるとすれば、フランスレベルで大きな規模の大学をつくっていくという、そういう合理化から来る改革でしょう。それが少し動き始めています。パリのレベルでも、ソルボンヌ大学を分割して現在は13の大学があるのですが、分割してできた大学を今度はまたまとめ直そうという動きがあり

ます。ただ 13 の大学を一つにするのではなく、いくつかを合わせて、規模の大きな大学をつくらうという動きです。パリ・ディドロ大学も、パリ第1大学と第5大学と一緒にという計画がかなり進んでいます。地方でも同じような改革が進んでいて、例えばポルドーみたいな街では、今まで三つあった大学を一つにしてしまおうという動きがあります。合理化を狙っているということもありますが、設備を共同で使うということも目的であります。あと、研究レベルで上海交通大学が世界の大学のランキングを行いまして、その結果フランスの大学の地位が非常に低いということが判明し、フランス政府は驚いて、規模を大きくしなくては行けないということを考えた。それもある程度関係しているのではないかと思います。

パリ・ディドロ パリ第7大学の研究交流

現在のパリ・ディドロ大学の規模は、学生数が 26,000 人、そのうち 2,000 人以上が大学院生です。院生が非常に多いということに非常に誇っており、博士論文を書き世界中から学生が集まってきているわけです。一般に留学生ですが、留学生という感覚がフランスにはなくて、入ってしまえば皆同じ扱いですので、「留学生」という言葉自体フランス語にはないのです。要するに外国人の学生が非常に多いわけです。一般にフランス人自体、親がイタリア人だったり祖父母がスペイン人だったり、そういう人が大勢いるわけですから、外国人、フランス人という区別がはっきりしない、そういう国なのです。外国人は 20% くらいだということは分かっていますが、実際に授業をしていて、区別をつけません。全く特別扱いはしませんので、日本から留学する場合、メリットもありますけれども、初めは少し苦労する面があります。

教員は大体 1,800 人ですが、研究者を含めると 2,700 人になります。フランスの大学は一般に国立科学研究所 (CNRS)、または国立医学研究所 (INSERM) などと研究所を共同で運営していることがあります。パリ・ディドロ大学にある研究所もそうです。CNRS の研究員が大学に来て、オフィスを持っていて、そこで研究をして、さらに授業やセミナーもするというシステムがあります。他にも二つの大学と一緒に研究施設を持っているという場合もあります。学部や大学院と違い、研究レベルでは非常にシステムが入り組んでおり複雑だと日本の方には言われますが、結局は、一つの研究設備をなるべく多くの人たちが利用できるように、国の負担にならないように合理的に使うことが目的で、だんだん大きな研究所になるのです。

一般にフランスの大学は、パリ・ディドロ大学も含め、研究に非常に力を入れています。今度情報科学の専門家が新しく学長になりましたけれども、特に研究を重視しており、これからは、評価の良い研究所に対してはなるべく大学が支援をしていく方針のようです。パリ・ディドロ大学には、現在大小合わせて 125 の研究所、研究チーム、研究室があります。人文科学系が 34、理系が 40、医学系が 42 です。125 のうち 53 が CNRS と、33 が INSERM と共同研究、あるいは連携して研究を行っています。

研究を重視するということは国際交流を重視するということにもつながるわけです。どういう国際交流の方法があるかといえますと、外国人の学生を大勢受け入れる、これがまず第一です。これは昔から特に力を入れなくても自然に行われていることですが、ヨーロッパレベルでの国際交流の推進は積極的に行っています。

ヨーロッパレベルでの学生交流

ウェブサイトの「インターナショナル」という項目を見ますと、「ERASMUS」という機構があります。これはヨーロッパレベルの学部間の交流システムで、お金がヨーロッパから出るわけです。例えば、私がオランダのライデン大学の日本語科と交流がしたいという場合に、もちろん相手も望んでいければの話ですが、割とスムーズに交流ができる体制が作れます。その体制というのは、毎年、学生が何名か、滞在期間を決めて交流し、奨学金がほんの少しですが出るというものです。教員のレベルでも毎年 1 人というように決めて、ヨーロッパレベルで交流を行います。大学間交流となるとかなり契約も複雑となりますが、ERASMUS の場合は学部レベルで、比較的簡単に進められるので、この ERASMUS による国際交流が盛んに行われています。実際に学生たちが動くには、やはり外国に出るので、英語ができないといけないとか、少し準備が必要とはなりますけれども、ユーロピアンクレジットと呼ばれる、取得した単位が元の大学で評価されるシステムもあります。教員レベルでも、パリ・ディドロ大学では毎年大勢の教授、または研究者を招聘しています。日本からも、私どもの学科で毎年 1 人は 1 ヶ月滞在中で研究して下さっています。それ以外にも国際会議や国際シンポジウムに参加する研究者がヨーロッパ以外の国からも来ています。大学を評価するときに国際交流が評価の対象となりますので、大学では、この先どんどん国際交流を増やすように進めています。

言葉が問題になっているのは日本と同じで、フランス語は少し前までは国際語だと言っていたのですが、最近はヨーロッパでも英語が非常に強くなってきました。フランス人も英語をもっとうまく話さなければいけないということで、大学の中でもそういう動きがかなりあります。研究者を呼んでもなるべく英語で交流するようと言われていました。英語教育は、最近は小学校 2~3 年から少しずつ取り入れていこうという方針です。それだけ教員を増やさないといけないので、どれだけ実施しているかは疑わしいですが、フランスはヨーロッパでは少し遅れを取っ



ているので、フランスの文部省も少し反省しているのですが、日本に比べると積極的に英語教育を行っているように思います。中学校と高校の英語の授業数もかなり増えたり、優秀な成績の生徒を集めてユーロピアン学級というのをつくり、英語の授業を増やしたり、または地理や歴史といった科目を英語で教えるなどのような形で英語教育を充実させています。したがって大学でも英語を話せる学生が非常に増え、教員の方が話せないということがよくあります。

日本の大学との国際交流

ヨーロッパ以外の国との交流についてですけれども、ウェブサイトを見ますと、アフリカの国とアジアも割合あります。やはり東アジア言語文化学部がありますので、しかし日本との交流は、それほどたくさんはありません。私が担当した日本語学科が中心になっている交流は、2004年または2005年以降締結した協定によるものが主で、古くから行っている交流は非常に少ないです。京都大学との交流は古くて、1970年代から教員レベルでの交流があります。パリ・デイドロ大学の教員が京都大学に1ヶ月間滞在して研究しています。そして京都大学から1人または2人、パリ・デイドロ大学で研究していただく、または発表していただくという交流です。他に、私は全く関係していませんが、研究レベルで名古屋大学との交流があります。それ以外にも、奈良女子大学も含め、私が特に関係して協定を結んだ大学があります。これは、大抵日本からの希望に応えたということと、日本語学科では大勢の学生が日本に行きたがっているという状況がありましたので、その希望に応えることを考慮したわけです。私たちの大学は比較的遅くに協定を結んだので、学生が日本に行く場合、奨学金が付きませんので、不利といえば不利なのですが、それでも絶対に行くという学生が大勢います。奈良女子大学の環境が非常に良いので、私たちはこれからどんどん学生を派遣して、日本で生活し、大学のいろいろな設備を利用して研究や勉強をしてもらいたいと考えています。

やはり、交流がしやすいのは、仏文科のある大学です。奈良女子大学もそうでしたが、日本側は仏文科の先生が中心になって

動き、私たちの方は日本語科の教員が動く、そのようにすると協定が結びやすいわけです。実際に交流するのはその学科の学生でなくてもいいわけで、もし奈良女子大学の、例えば理学部の学生が、この協定を利用してパリ・デイドロ大学に留学したいということでしたら、もちろん可能ですので、どんどん参加していただきたいと思います。最近の傾向としては、日本側も国際化を推進しようという動きがありますので、大学院レベルでフランスの研究者と共同研究を進めようと希望する大学が出てきています。

奈良女子大学との国際交流のこれから

この先、奈良女子大学とはどういう交流を進めたらよいか、今回案内していただいて考えたことを申しますと、まだ協定を締結して一年経っておりませんが、今の段階では、学生交換は学部レベルでも非常に有意義で私たちとしてはこのまま続けたい気持ちはもちろんあります。ただ、奈良女子大学は研究を重視しているということが分かりましたし、いくつかの分野においては非常に専門的で進んだ研究がなされていて、生活環境などの分野は、パリ・デイドロ大学でも今までそれほど研究されていなかった分野ですが、これから研究を希望する人が出てくるのが予想されるので、パリ・デイドロ大学の方でも積極的に勧めていけば効果があるのではないかと考えています。研究レベルでも、この交流をうまく利用して進めていけたらよいのではないかと思います。もちろん、日本語学科と奈良女子大学との交流、さらにそれをもっと発展させて、理学部同士での交流などもできればよいのではないかなと思います。パリ・デイドロ大学では、大学院レベルなら英語でも通じますが、学部レベルではフランス語が分からないと難しいです。フランス語が話せる人がいた場合、ぜひフランスに留学していただければと思います。今回奈良女子大学でいろいろ見せていただいて、非常に恵まれた環境だということが分かりましたので、これからどんどん学生に留学するよう勧めたいと思っています。今日は本当にもうもありがとうございます。

4. 奈良女子大生の海外留学体験記

平成18年度から19年度にかけて海外の協定校に短期交換留学をした本学の学生に、留学体験記を書いて頂きました。

「留学体験記」

文学部 人間行動科学科 3回生 吉田智江
留学先: ミルズ大学(アメリカ合衆国)

私は、アメリカにあるミルズ大学にて、交換留学生として2006年の秋 semester の期間、学習することができました。留学は、高校生の頃から憧れていました。自分の知らない世界で生活してみたい、ただの憧れにすぎませんでしたが、とても



興味を持っていました。しかし、実際、留学となると英語力、費用、また、一人で生活して行く不安などもあり、思い切ることができずいました。そんな時に、実際にミルズに留学される先輩が同じ研究室におられて、色々相談にのってもらっているうち、今できるチャンスがあるなら思い切って行動した方がいいと言われ、踏み出す事ができました。

それからは、色々、情報を集め、英語の勉強をしました。留学が決まってからは、不安なことも多かったですが、それは色々な人に聞いたりして、不安をなるべく減らし、ワクワクな気持ちでした。

留学して、最初はホームシックにかかり、英語もなかなか上達せず、自分の殻に閉じこもってしまう時期もありました。徐々に友達もでき、慣れていったのは、3ヶ月経った頃です。もう、1カ月ぐらいいか残っていませんでした。それが、とても残念です。

取っていた授業は主に音楽の授業で、実践的なパフォーマンスの授業を多く取っていました。奈良女子大学では実践的な授業は取れないからです。卒業論文の内容としてはジャズの自由さについて、社会的、そして音楽的に見て行こうと思っているのですが、やはり実際にジャズの生まれたアメリカで音楽に触れ、そして日本との違いなども感じたかったです。

もちろん授業だけでなく、異文化の中での生活、そして、休みを利用して校外に出かけ、いろいろなものに刺激され、今まで日本では当たり前だったことがそうではないことに気がつきました。学生も自分の意志をしっかりとって発言します。今まで食べた事のないような料理があります。治安が悪く、夜の一人歩きなんて考えられません。

異文化の中で、自分を見つめ直すこともでき、視野も広げることができたのではないかと思います。本当によい経験ができ、思い切って留学してよかったと思えました。まだ気づいていないけど、今の私に影響を与えていることがまだまだ多くあるように思います。

「交換留学に関する報告」

人間文化研究科 住環境学専攻 M2 田中杏奈

留学先：ノースカロライナ大学グリーンズボロ校(アメリカ合衆国)

10ヶ月間、アメリカのノースカロライナで本当に素晴らしい交換留學生活を送らせて頂きました。国際課の皆様はじめ、奈良女子大学国際交流基金からも援助して頂き大学の皆様に心から感謝の意を表したいと思います。

私が派遣されたノースカロライナ大学グリーンズボロ校は、緑あふれる美しい街にあります。キャンパスは美しく、緑の芝が広がり、朝にはリスやウサギの姿が見られます。図書館も深夜まで開いているし、学内には立派なジム(グループエクササイズ、ロッククライミング等もできます)もあり、健康的に過ごすことができます。

寮ではInternational Houseに住んでいました。その寮では毎週金曜日にそれぞれの国が自分の国の文化を紹介するFriday Festivalという行事があります。日本も参加して、浴衣を着て様々な日本文化を紹介し、日本の料理もつくりました。予想外に人がたくさん来て、改めて日本に対する世界の国の意識の高さを感じることができ、とても嬉しく思いました。

授業に関しては、専攻に関連して「History of Interior Design: インテリア建築の歴史」、「Adolescent Development: 思春期の子どもの発達」等の授業等を受講していました。インテリアの授業はパワーポイント作成やデッサン等課題がとても多く大変でしたが、先生が毎回講義で繰り広げる西洋建築とインテリアのレクチャーは圧巻でした。授業の一環として美術館や有名建築を見学に行く等遠征もし、中身の濃い授業でした。子どもの発達の授業では、人種的要因がどのように子どもの発達に影響するのか等、アメリカらしい視点から授業展開がなされていました。この授業はディスカッション形式だったので、皆が考えていること



がよくわかり、毎回新しい発見があったので、授業に行くのが楽しみでした。とても質の高い授業ばかりだったと思います。

授業以外にも、私の専門は住環境学であり、修士論文も日米の住環境比較を行いたいと考えていたため、アメリカの住宅事情に関することを調べていました。図書館の文献を読んだり住宅の見学に行ったり、自分の目で見て触れたことは、修士論文のテーマとする研究の重要な踏み台となったと思っています。

語学面では、最初は授業でも教授やクラスメートが何を言っているのか完全には理解できず、苦労しましたが、だんだんと慣れ、最後のペーパー(日本での集団協定の事例をテーマに書きました)では先生に「おもしろかった」と言ってくることができました。

かけがえのない友人も得ることができました。特に一緒に授業を受講していた子とは一緒に勉強するうちにすっかり仲良しになり、学期が終わるとその子のお宅にホームステイさせて頂いたり、一緒にバハマへ旅行に行ったり、お世話になりました。

最後に、様々な国の留学生や、人種の多様なアメリカ人と一緒に生活したことは、これまで日本での価値観しか知らなかった私にとって、多くの価値観を自分の中に取り入れては吐き出す

日々だったと思います。とまどったり、つらいと思うこともありましたが、そのことが結局一番自分を成長させてくれたのではないかと思います。そして、世界の人々は皆 Happy に生きていて、とてもおおらかで純粋です。彼らには、私のネガティブな部分を

何度も Happy な要素に変えてもらい、助けてもらいました。この留学で出会った人全てに感謝したいです。交換留学で得たことは私の生涯の宝物です。この経験を元に、さらに国際理解のある人間になっていきたいと思っています。

「オーストリアに留学して」

文学部 言語文化学科 4回生 麻生陽子
留学先: グラーツ大学(オーストリア)

今回、オーストリアのグラーツ(Graz)大学で約一年間留学する機会に恵まれました。ここでは、短期間では決して得られない経験を数多くし、今までにない濃い時間を過ごすことができました。そのため今でも何かがふと頭をよぎるたびに、さまざまな思い出が沸々と蘇ってきます。

その中でも、生活を始めた当初、予想もせず一番初めにぶち当たった壁というのが、オーストリアドイツ語。その聞き慣れない音やリズムは、私にとってあたかも二重の外国語のようで、そのあまりに理解ができないストレスからか、数週間腹痛が続いたのですが、ある時オーストリアの学生から勧められたチャービルのお茶のおかげで、私は見る見ると回復したこともありました。このように生きていく知恵などをもらいながら、また現地で使われている言い回しや方言を耳にし、その意味などを一つずつ聞いていたり、多くの人と関わっていくうちに、そうした人たちの気配りのようなものも感じ、さらに大学で受けたオーストリアドイツ語の講義の影響もあって、それまで悩ませていた(今でも私を悩ます)オーストリアドイツ語、言葉そのものが今では興味の対象となりました。その他、国内外の旅をすることも多く、その間も常に身の周りのあらゆる刺激で、心乗せられることも多くありました。

このような体験ができたのも、この留学を決めてから留学中、そして帰国に至るまで絶えず多くの人に助けられてきたからです。そうした留学に向けては、約一年前から奨学金に応募し、受験可能なドイツ語試験を受験しながら、大学への願書をはじめ、大使館と連絡を取りながらその他の書類の準備を出発直前ま



ですすめました。私は下宿をしていることもあり、本籍地のみでの発行書類などの収集には労力や時間を要したのを覚えています。しかし住居を海外へ移すまでの入国、そして帰国までの繁雑な期間も今思うとあっという間でした。

最後に一言。私は以前からずっと、海外に身を置くということに憧れを抱いていたものの、勉強や語学以外の明確な目的が自分には正直なところ見えてなく、何のために留学するのだろうとよく考えていました。もちろん何か積極的な理由の元、留学をすることに越したことはありませんが、全く違った環境に一人いるだけでも、そしてそこで順応していけると、自ずとみえてくるものは、想像以上にたくさんあると思います。「どうかなる」と構え、迷いながらも一歩踏み出してみたら、何か新たな目標に向かってもいいのではないのでしょうか。外から日本を見ながら、そこでは知らない自分も知ることができるかもしれません。

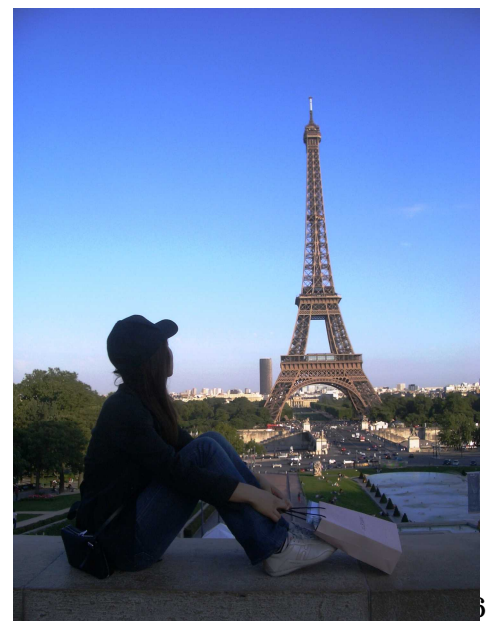
「パリ第七ドゥニ・デイドロ大学留学体験記」

人間文化研究科 言語文化学専攻 M2 佐々木和美
留学先: パリ第七ドゥニ・デイドロ大学(フランス)

私は平成十八年九月より翌年一月までの約半年間、パリ第七ドゥニ・デイドロ大学において派遣交換留学生として過ごしました。第一期生ということもあり、前例がなく必要な資料も不足し、出発前はわからないことだらけでしたが、いざ始めてみると時が経つのは早く、こんなに充実した半年はなかったですし、もう二度と同じ時を過ごせないと考えるほどよい体験となりました。

留学前の準備としては、まず学力について協定条件を満たすべく試験を受け、次に大使館でVISAなど必要書類を揃えました。

新学期前に留学生対象に特別語学授業が二週間組まれており、本学期に入ってから院の主要専門科目を二つ、学部での科目を五つ、語学を三つ、体育を一つ、計十一科目受講しました。講義形式とディスカッション形式の授業があり、毎回テーマが



決まっています。板書はほとんどなく教授が話すのを生徒がひたすら筆記するものが多かったように思います。生徒の発言はあまりなく、控えめであると感じましたが、授業終了後にはカフェでの活発な討論や図書館での熱心な勉強姿が印象的で、非常に触発されたものです。体育は半年分の学費を納めるとどんなスポーツでも自分の時間割に合わせて受ける事ができ、クラブ活動がない分、種類が非常に多く充実しており大学生活の楽しみの一つでした。

週末は郊外まで遠出をしたり、美術館やコンサートなどに出かけました。日本はテレビなどの娯楽が中心ですが、フランスではテレビを見るのは年寄りだけで、若者は公園で本を読んだり愛を語っています。そういう過ごし方の違いから衣食住に関するあらゆる文化の違いまでいろいろと考える事の多い留学であり、この国で哲学が盛んなのが分かる気がしました。

半分空っぽの器、でも見方を変えたら半分満たされているともいえます。違いを理解すると言う事は、物事にはいろんな面があり、それを知ることです。それぞれの国にそれぞれの文化があり、物事にはいい面と悪い面がある。わかっていたことですが、今回観光客としてではなく住人としてパリで過ごし、このことを痛烈に感じました。友達も沢山出来、面白いところにも色々行きました。怖い目にも会いましたし、イヤなことも数えきれないくらいありました。一人では何も出来ないが、一人で何とかしなければならぬ事が山のようにありました。残念ながら外国で暮らすと言う事は、常に自分が外国人であるということであり、自分に責任を持ち、自分の意見を主張して生きていかなければならない。これは外国でなくても同じですが、外国にいるほうがそれを強く感じます。最終的には頼れる人は自分しかないのだから。

今回の留学は、周囲の人々の温かさ、冷たさ、気まぐれ、そして人と人とのつながりの素晴らしさを肌で感じた語学留学以上の文化を深く学んだものになりました。この経験を生かして、変幻自在に形を変える幅広さや強みを持ってしなやかにタフに生きていきたいと思えます。

5. センター活動 (2007年7月～9月)

国際交流センター及び国際課では、様々な事業を企画・実施しています。その一部をここでご紹介します。

国際交流センター及び国際課主催事業一覧

2007年7月28日・29日「日本留学フェア(台湾)」

2007年8月17日～9月14日「南京大学中国語研修」

2007年9月8日・9日「日本留学フェア(韓国)」

2007年9月13・14日「外国人留学生実地見学旅行」

2007年9月14・18～21・25・26日「2007年夏期英語実学講座」

「日本留学フェア(台湾・韓国)」

奈良女子大学は、毎年海外で開催される日本学生支援機構(JASSO)主催の日本留学フェアに参加し、開催国の日本への留学希望者に対して、本学の教育・研究上の特色や入試情報さらには留学生活に係わる諸問題についてのアドバイス等を行っています。本年も台湾及び韓国で開催された留学フェアに参加しました。

台湾、韓国ともにフェア来場者数が昨年を大幅に上回り、本学のブースにも多くの人々が訪れ、熱心に質問をするなどしていました。

【台湾】

高雄市

日時：平成19年7月28日(土)10:00～16:00

会場：高雄工商展覧中心

ブース数：大学51校 専門学校・日本語学校等56校

フェア来場者数：1,348名

本学ブース来場者数：26名

台北市

日時：平成19年7月29日(日)11:00～17:00

会場：台北世界貿易中心

ブース数：大学58校 専門学校・日本語学校等56校



フェア来場者数：4,360名

本学ブース来場者数：70名

本学の参加者：野村鮎子 文学部教授：国際交流センター員

宮前真奈美 留学生係長

林 怡秀 台北会場での通訳 / 奈良女子大学大学院博士前期課程修了者

【韓国】

釜山

日時：平成19年9月8日（土）10：00～16：00

会場：BEXCO (Busan Exhibition & Convention Center)

フェア来場者数：2,020名

本学ブース来場者数：35名

ソウル

日時：平成19年9月9日（日）11：00～17：00

会場：COEX (Convention & Exhibition Center)

フェア来場者数：4,199名

本学ブース来場者数：86名



本学の参加者：向井洋一 生活環境学部准教授：国際交流センター員

北博文 国際課国際交流係長

金秀妍(キムスヨン) 韓国会場での通訳 / 平成18年度奈良女子大学生生活環境学部特別聴講生

「南京大学中国語研修」

国際交流センターは、8月17日から9月14日まで、南京大学海外教育学院で中国語研修を実施しました。本学学生19名が参加しました。研修の詳しいレポートは次号のNews Letterに掲載します。

「外国人留学生実地見学旅行」

2007年9月13日、14日と一泊二日の日程で淡路方面への留学生実地見学旅行を実施しました。留学生34名が参加し、鳴門海峡のうず潮見学の他、阿波踊りの見学・体験、人形浄瑠璃の観劇、ハーブ石鹸・お香作りの体験等を行ないました。

初日はまず、明石海峡大橋及び大鳴門橋を渡り、徳島県側から鳴門海峡のうず潮を見学しました。渦の道からは、半開放の壁面やガラス張りの床面からうず潮を観察できるようになっており、留学生は熱心にその様子を観察していました。続いて、阿波踊り会館にてショーを見学しました。見学後は実際に阿波踊りを体験することができ、ほとんどの留学生が舞台におり、楽しそうに踊っていました。

二日目は、悪天候を予想して、当初予定していた地引網とバーベキューが実施できなかったことが残念ではありましたが、午前中に人形浄瑠璃を観劇し、午後には、地引網の体験学習の代わりとして、お香とハーブ石鹸作りを実施しました。体験学習では、希望により、お香とハーブ石鹸作りの2つのグループにわかれて作業を行ない、できあがった作品はお土産としてそれぞれ持ち帰りました。

この二日間を通じて、参加者同士の交流も深まり、また伝統文化に触れることにより日本をさらに理解する、有意義な旅行となりました。



「夏期英語実学講座」

国際交流センターは、9月14、18-21、25・26日の日程で、夏期英語実学講座を開催しました。本講座は、TOEFL 受験を強く意識した英語運用能力育成を目的とし、留学や就職、進学等のために TOEFL 受験を考えている本学の学生を対象として実施しました。京都大学高等教育研究開発推進センターおよび同大学院人間・環境学研究科外国語教育論講座の田地野彰教授が講座企画責任者として講座全体のコーディネートを行い、TOEFL 受験に必要な語彙、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの各分野を専門に研究している同大学院外国語教育論講座の学生5名が、各分野の勉強方法等の指導をして下さいました。毎時間、非常に内容の濃い授業が行われ、学生は大変熱心に授業に参加し、楽しみながら勉強をしていました。



6. センター図書情報

国際交流センターでは、奈良女子大学で学ぶ留学生・日本人学生・ボランティア活動に興味をお持ちの皆さんに図書の貸し出しを行っています。ぜひご利用ください。今回新しく入手した図書は以下の通りです。

センターにはこんな本があります

【一般図書】

オリエンタルズ：大衆文化のなかのアジア系アメリカ人 / 現代世界の戦争と平和 / 北京大学てなもんや留学記 / 大地の慟哭：中国民工調査 / 「最も短い文」から「疑問詞 what」まで / My Japanese kitchen: thoughts on housekeeping, working, women and Japanese life / Japanese women: short stories / The pickled plum and the Japanese sword: Japanese wisdom exemplified in history / Soichiro Honda: the endless racer /

【辞書】

現代中国語常用略語辞典 /

【語学教材】

国際会議・スピーチ・研究発表の英語表現 / Why?にこたえるはじめての中国語の文法書 / Longman preparation course for the TOEFL test: next generation iBT / 韓国語変遷史 /

【雑誌】

岩波ブックレット No.702-707 / 読者 /

【漫画】

のためかインタービレ 16-18 / エマ 6-8 / 私は告発する まんが「慰安婦」レポート / 大発作：てんかんをめぐる家族の物語



7. センター来訪者 (2007年7月～9月)

日付	来訪者	来訪目的
7月23日 ～24日	パリ・デイドロパリ第7大学 東アジア言語文化学部 日本語学科 堀内美都教授 (フランス)	学長表敬、視察、講演
8月24日	国立清華大学 陳文村学長、陳中民執行長他 (台湾)	学術・学生交流協定を締結
9月28日	トリア大学 Peter Schwenkmezger 学長、Hilaria Gössmann 日本語学科主任教授 Gretlis Gaungs 国際交流部長 (ドイツ)	学長表敬



日本語文章作成サポート

国際交流センターでは、本学の留学生の皆さんが読み易い日本語文章を書けるよう支援する「日本語文章作成サポート」を行っています。本学の大学院生が文章作成アドバイザーとなり、留学生の書いた文章に対しアドバイスをしてくれます。利用希望者は、国際交流センターにお問い合わせください。



シリーズ「国際交流」- 7

国際交流センターは、(財)日航財団の依頼を受け、JAL スカラシッププログラム / アジアフォーラムへの参加者2名を募り、面接により菊本さんと鈴木さんを選抜しました。プログラムは、7月18日～22日、石川県金沢市で開催されました。プログラムは、講義、フィールドワーク、学生セッション、アジアフォーラムから成り、アジア・オセアニア諸国から参加した同年代の学生達と英語を通して交流するというものでした。参加レポートを菊本さんと鈴木さんに書いていただきました。

「JAL スカラシッププログラム / アジアフォーラム」

人間文化研究科 住環境学専攻 M1 鈴木栄里子、文学部 人間行動科学科 4回生 菊本裕子

私たちは7月18日～22日の4泊5日間、金沢で行われたJAL主催のアジア・オセアニアフォーラムに参加した。日本、中国、台湾、韓国、ベトナム、タイ、マレーシア、シンガポール、フィリピン、インドネシア、オーストラリア、ニュージーランドから選抜された大学生と一緒に活動し、講義を受け、それについて討論し、自分たちの考えを発表するというプログラムである。日本人以外の学生は他にホームステイプログラムなどもあり、日本文化も体験する。今回のフォーラムのテーマは“Challenges for the Future”(未来への挑戦)ということで、今世界中の問題でもある「環境問題」について話し合った。

1 日目は夕方にスカラーのメンバーと合流した。(ここでスカラーとは、日本人学生以外のメンバーのことを言う。)英語を使用するのが久しぶりだったので、うまくコミュニケーションを取れるか不安だったが、スカラーの皆さんは私たちを温かく迎え入れてくれた。夕食のジンギスカンを食べながら、会話を楽しみ、少しずつ、お互いのことについて理解を深めていった。

2 日目にはスカラー達と石川観光をした。一日ともに過ごすことで、お互いの間にあった壁が少しずつなくなっていく気がした。千里浜海岸では、漂着ゴミについてのお話を聞き、ごみ処理場ではリサイクルについて学習した。これらのように環境問題に関連した場所を訪れ、環境問題は私たち一人ひとりが考えていかなければならないと思った。夕食後は3日目から本格的に始まる話し合いをするに当たり、この日から参加した石川県学生も交え、グループのメンバー同士の自己紹介と、スカラーが東京でのセミナーで考えてきたことについて意見交換を行った。

3 日目は午前中に里山についての講義を受けた。その後、環境問題について、どのように取り組んでいったらよいのかをそれぞれのグループごとに話し合い、発表の準備をした。各国の環境への取り組みについて意見交換をすることができ、考えることも多くあった。また、日本に対する意見も聞くことが出来たので、日本も今以上に環境に配慮していかなければならないと思った。

4 日目はアジアフォーラムが開催され、2日間で話し合ったことを、グループごとに発表した。環境問題について、さまざまな意見を聞くことが出来たので、とても勉強になった。今回のように、日本という狭い次元で環境問題を考えるのではなく、アジア・オセアニアの国々と、世界全体で考えていかなければならないと感じた。また、元上智大学教授で通訳者として世界で働く井上氏のコミュニケーションについての講義を受け、改めて異文化を持つ方と触れ合うことの大切さについて学んだ。

夜に行われた国際交流祭りでは、今回参加したメンバーと楽しい夜を過ごし、生まれた国が異なっても、お互いを尊重しあった交流の大切さを深く感じた。

今回、このような貴重な機会に参加し、環境問題を違った視点からみることもできたし、多くの外国の友人を作ることもできた。参加に際して、支えてくださった国際交流センターの皆様方に感謝を申し上げます。



編集後記

今年は残暑が厳しかったですが、ようやく涼しくなり、虫の音が聞こえてくるようになりました。これから過ごしやすい季節になりますね。国際交流センターNews Letter vol.8にご意見ご感想がありましたら、右記連絡先までお願いします。



(編集者:早川絢子)

奈良女子大学国際交流センターNews Letter vol.8

2007年9月発行

奈良女子大学国際交流センター

〒630-8506 奈良市北魚屋東町

TEL: 0742-20-3736

E-mail: iec@cc.nara_wu.ac.jp

<http://www.nara-wu.ac.jp/iec/index/index.htm>

